ぬ～べ～転勤する

ハタボー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぬ～べ～転勤する

【Ｎコード】
Ｎ７４４７Ｘ

【作者名】
ハタボー

【あらすじ】
九州で半年を過ごしたぬ～べ～が再び転勤する。転勤場所は天の川小学校。ぬ～べ～は、そこで霊力がまったく無い（自称）少女の先生となって事件に巻き込まれる彼女を中心とした生徒たちのために事件を解決するために奔走する。
これは原作と設定、時系列のずれ、雰囲気、性格などが変わっています。ご注意ください。また、勢いと気分転換に書いているもので、最後までいけるかどうかわかりません。しかもギャグがうまく書けないので、面白くないかもしれません。

最後に、初めての投稿なので酷評などは遠慮してください。もちろん、アドバイスはありがたいです。

では、楽しんでください。

プロローグ（前書き）

かなり短いです。

ちなみにぬ～べ～は、原作の最後に行く予定だった九州の学校で半年間過ごしていました。

プロローグ

九州のとある小学校の校長室。
古びた二つのソファに、初老の男性と特徴的な眉毛をした若い男が座っていた。

「それで、転勤ですか。」

「ええ、あなたが転勤してきてまだ半年ですが、どうしてもと先方から連絡がありまして。」

「分かりました。しかし、二学期の途中からでもいいですか？」

「その点は、既に先方にも伝えてあります。向こうも二学期に入って異常に気付いたようで、話はつい先ほど向こうの校長から直接連絡があったのですよ。ですから、急な話ではあるのですが、受持ちのクラスがない鵺野先生に至急行ってきて欲しいのです。」

校長は急な転勤話で申し訳ないのか、気まずそうな顔をしながら鵺野先生を見た。
当の鵺野は、少し迷った様に視線を左右に振った。

「しかし、それではこちらを空けることになります。確かに大元は断ちましたが、まだ妖怪が出る可能性もあります。」

「ははは、大丈夫ですよ。学校の超常現象もすっかり止んで、校内も明るくなりました。ここ二ヶ月は悪さをする妖怪もいませんし、大丈夫でしょう。」

おかげで体調も治りました。という校長を見ながら鵺野は苦笑を浮かべる。
春に赴任したばかりの校長はガリガリに痩せて、去年現れた疫病神がまたやってきたかと除霊しそうになったのでる。

「・・・では、妹と妻をここに残しておきます。妹は、ここに慣れてきたのでここで卒業させてやりたいですし、妻は頼りになりますから、大抵の事は大丈夫でしょう。」

義妹眠鬼は、既にパンツが無いと力が出せないという弱点を克服して力も兄達に負けない程になっていた。
また、妻ゆきめは、安定した妖術だけでなく、春から始めたアイスクリーム屋の店員達妖怪も付いている。
逆に鵺野の方が、戦力的に劣るといっていい位である。

「そうですか。新婚のお二人を離れ離れにするのも気が引けますし、無理にここに残すことはありませんよ。とにかく、あっちの学校のこと頼みましたよ。鵺野先生。」

「お任せください。」

若い男鵺野鳴介は、ドンと胸をたたいた。

そして、数日が過ぎる。

プロローグ（後書き）

こんかいの登場人物は、男二人だけ。

主人公はの名前だけで、わかりますよね？

でも、新しく行く学校の名前だけで原作がわかる人がどれだけいるのか。

私は、まったく知りませんでした。

次は、８月末まで飛びます。

第一話　ぬ～べ～との出会い（前書き）

ぬ～べ～とさつきとの出会いです。
時期は第四話くらい死者からのピアノ曲　エリーゼぐらいです。

第一話　ぬ～べ～との出会い

宮ノ下さつきは、父と弟の三人家族である。
東京で数年過ごして来たが、急に父が母方の実家に引っ越すことを決めたため、東京から離れて天ノ川小学校に転校してきたばかりだ。
父は土木関係の仕事で家事はできず、弟はまだ幼いため任せるのにはちょっと頼りなく感じているため、家事はもっぱらさつき一人でやっている。

もちろん、夕食の買出しもさつきの仕事。
毎朝のチラシをチェックして、頭の中で考える献立を決めている。
今日は、二十円程安いジャガイモに、十円ほど安いニンジン、お買い得商品のルーと飲み物を買いに隣町のスーパーまで学校帰りに寄っていた。
スーパーで買い物を済ませ、帰ろうという時に近くの米屋で徳安を発見。
小躍りしたくなるほど安かったため、十キロを買って、店を出て十メートル程歩いた所で後悔し始めた。

「重い、買いすぎたー。」

さつきは、自分が持っている袋を恨めしげに見つめる。

「ルーは良いとして、ジャガイモ一袋にニンジン五本、ジュース１．５？が三本に米１０？は多かったー。でもなーお買い得だったし、うー。」

重みに耐え切れずに、戻ってきたスーパーの外のベンチに置いた。

そして、どうしたものかと頭を捻る。

「バスはもったいないけど、家まで持っていけそうにない。」

もったいないの精神は大事だ！と気合を入れて再び持とうと袋に手を伸ばす。

「ちょっと、君。」

後ろから声を掛けられた。

「はい、なんですか？」

さつきが振り返ると、黒い上着を着た長身の男が立っていた。
まだ若く、二十代くらいだろうか。
特徴的な長い眉毛で、美形といっても遜色ない顔立ちをしている。

「天ノ川小学校はどこか教えてくれないか？」

片手に紙切れを持っている。
クシャクシャに丸め込まれたその紙は、大して役に立たなかったのだろう。
困ったその顔は、どこか人の良さを感じさせた。

「ここから距離があって、近くにすんでますから案内しますよ。」

にこやかに笑って買い物袋を持とうとすると、後ろから伸びた黒い手袋をした左手がジュースの袋を、右手が米袋を持った。

「・・・」

「案内してもらうから、その礼に持つよ。」

人の良さそうな笑顔がさつきの無言の問いに答えた。

「よろしくお願いします。」

軽く一礼して、帰路についた。

「へえ、君も最近引っ越して来たのか。」

「はい。両親の実家がこっちにあって、父が急に戻りたいって言ってこっちに来たんです。」

「ここってことは、天ノ川小学校に転校？」

「はい。弟も一緒に。」

何もしゃべらないのは、とぽつりぽつり話していた二人は、いつの間にか談笑するくらい仲良くなっていた。

「二学期からとは、お父さんも思い切ったな。まあ、俺も急に言われて引っ越して来たから人の事は言えないけどね。」

「ははは、でもお父さんは急でしたよ。何も言っていなかったのに、夏休み入る直前、『お母さんの実家に帰ろう』でしたから。」

「ん？仕事じゃなかったのか？」

男は、訝しげに特徴的な眉を顰めた。

そのことに気付かず、さつきは話を続ける。

「はい。朝起きてから難しい顔をしていて、朝食の時いきなり言ったんです。前の夜は普通だったのに、まるで夜中誰かに言われたみたいに。」

「へえ、もしかすると予知夢か誰か枕元に立ったのかもな。」

笑い飛ばすかと思った話に、変な反応を示されて、さつきは足を止めた。

「予知夢などは、そこまで珍しいものでもないからな。大人でも信じる人はいると思うし、案外馬鹿にしたものでもない。枕元に立つ方は、その人の希望が具現化してたりするが、どちらかの霊力が高いと実際にできるらしい。」

真剣な顔で言う男。

さつきは、馬鹿らしいと思う反面、自分が最近体験していることから完全に馬鹿にできなかった。

だが、妖怪たちのことを言うわけにもいかなかった。

「え、え～と、結婚しているんですか？」

とっさに話題をそらすことにした。

強引すぎたかなと思っていると、男は顔を赤らめて左手を頭の後ろにやった。

「いや～。」

「結婚してるんですか。」

少し意外であったが、優しそうな感じから別におかしくないかなと思いなおした。

「少し事情があって、妻と義妹は九州にいるんだ。」

そう言いながら胸ポケットから一枚の写真を取り出して、さつきに見せた。

写真には、男を挟んで水色の髪をショートにして、白い和服を着た少女、もう片方はスタイル抜群の少し変わったツインテールの少女が移っていた。

二人とも十代半ばぐらいでかなりの美少女である。

「え、ええ～！！こんな美人と！」

「どうだ、両方綺麗だろ？こっちの青い髪の方が妻のゆきめ。もう片方が妹の眠鬼だ。」

「・・・妹さん何歳ですか？」

奥さんの方は突っ込むのを避け、妹の方を聞いた。

「ん～何歳だったっけな？・・・まあ、今小６だな。」

小６！？　こんな体型で！？

驚愕するさつきを置いて、再び歩き始める男。

眠鬼は、胸がDカップぐらいで、一般小学生どころか中学生以上のスタイルを誇っている。
かつて、童森小学校に現れた時も男子の視線を集めていた程の美少女である。
さつきも体型を気にする年頃である。
眠鬼の体型を見てぶつぶつ呟いていたが、立ち直ったのか、「どっこいしょ〜！」と掛け声を上げて、気合を入れなおした。

「大丈夫か？」

男の呆れ半分気遣い半分の声に、慌てて周りを見回すと既に学校の前であった。
いつの間にかここまで来ていたらしい。

「ふうん、ここが天ノ川小学校か。今度は家か。学校からこっちの方角だな。君は一緒の方向か？」

「あ、さつきです。宮ノ下さつき。はい、同じ方向です。」

「ははは、家も同じ所だったりしてな。」

「まさかー。」

二人で笑い合ったが、そのまさかだった。

「本当に同じ所とは。」

男の家は、さつきの家の隣であった。

どうやら男を呼んだ人物の伝手で、空き家を用意して貰ったらしい。

「ははは、ほんとですね。」

さつきも乾いた笑い声をあげた。

「はい、荷物。」

「ありがとうございます。」

いつの間にかすべての袋を持っていた男から、袋を受け取った。

「じゃあ、気を付けてな。」

男はそういうと、隣の家に入っていった。

さつきは、それを見届けて家に入った。

「あ、名前聞くの忘れてた。」

第一話　ぬ～べ～との出会い（後書き）

はい、主人公二人の出会いです。

ゆきめさんと眠鬼さんの出番はあるんでしょうか。

今のところ出す予定はないんですが。

次は、旧校舎の登場です。

新任槇野鳴介（前書き）

宮ノ下敬一郎の年齢が分からなかったので、小学2年生という設定にしています。

新任鵺野鳴介

さつきと出会った次の日の朝。
鵺野は、校長室にいた。

「では、鵺野先生よろしくお願いします。」

「こちらこそお世話になります。」

鵺野は校長との挨拶を終えて、校長室を出た。

「あ～、緊張した。」

鵺野は校長室を出て、深く息を吐いた。

「でも、なんで霊能力者ということは秘密のしておかないといけないんだ？」

校長から鵺野は、霊能力者の事や妖怪退治のことはあまり公にしないよう念を押されていた。
今まで自分から名乗っていただけに変な感じがした。
一応旧校舎の鍵や学校の噂については教えてもらった。
今日は授業がないため、早速調査に向かうことにした。

「二学期が始まってこの二週間で、新校舎の全トイレが突然同時故障。体育館への落雷。点検したはずの旧講堂でバスケットゴール落下と梁が折れる。旧講堂脇の木への落雷。そして、最後に昔から旧校舎にお化けが出るという噂。最後はともかく他のは事故や偶然にしては出来過ぎてるな。」

霊の仕業の可能性はあるな。と、まずはトイレの一つに入った。
「いやあ、緊張して朝からトイレにも行ってなかったんだよなあ。」
一人で照れながら、トイレを済ませる。
手を洗って、懐から霊水晶を取り出した。
「・・・霊気は残ってないか。」
期待していなかったのか、落胆もせずにトイレを出た鵺野は、事故や落雷したところを見て回ることにした。

ここ5年3組では、新しい先生が噂になっていた。
「そうそう。事故の現場を見て、学校の安全確認をしてたよ。」
「あ～私も見た。修理中の体育館を見て、工事の人と話してた。」
「俺は、旧講堂に入るのを見たぞ。」
トイレの故障や落雷、バスケットゴールの落下など、天ノ川小学校では、事故が続発しているのを受けて、教育委員会から調査員兼教師が来たと噂が流れていた。
実際、新任の教師らしき黒い上着を着た男が事故現場で確認されたことから、噂の信憑性と話題性が上がっていた。

その噂の中で、5年3組の3人は、6年生と2年生を1名ずつ加えて内緒話をしていた。

「調査しても無駄なのにな。」

活発そうな少年が、少し嫌味っぽく噂の教師の努力を否定した。

「しかし、異常であるだけに、僕と同じく心霊現象研究家という可能性もありますよ。」

眼鏡を掛けた、たらこ唇が特徴的な少年が人差し指を立てて言う。

「まっさかあ。だって、私達以外誰も知らないはずよ。」

「そうですわね。トイレは普通に直りましたし、劇も成功しました。」

さつきと上級生であるピンクのリボンを付けたおっとりとした少女が眼鏡の少年の言葉に反論する。

「それこそですよ。確かに多いかもしれませんが、調査員が派遣される程ではないと思うんです。」

「まあ、心霊研究家でも役に立たなんじゃ一緒だろうよ。それより、ピアノの止め方を考えないと。」

そう、5人が集まった理由は、昨日さつきが聞いたお化けピアノのエリーゼをどう防ぐかを話合うためであった。

さつきは、昨日の放課後と夜に一回ずつエリーゼを聞き、後2回で死んでしまうのである。

「昨日から考えてたんですが、音なら耳栓をして聞かなければいいんですよ。」

眼鏡の少年柿ノ木レオが、今朝買って来たらしい耳栓を取り出した。

袋には、『強力！！　あの選挙カーも工事の音も完全シャットダウン！』と書かれてあった。

「おお、これなら聞かなくて済むな。」

「レオさん、すごいです。」

「ありがとう。」

思わぬ名案に、3人は喜び、対策会議は解散と相成った。

こうして、1日目は鵺野とさつき達はすれ違った

新任槲野鳴介（後書き）

次回は、天邪鬼の登場です。

天邪鬼、同族を見かける。（前書き）

私が思う学校の怪談の裏の主人公天邪鬼がやっと出てきます。

おそらくこの小説で天邪鬼の出番は、原作より多くなると思います。

というか、したい。

天邪鬼、同族を見かける。

天邪鬼は、天ノ川小学校に出る妖怪達でも特殊な存在である。

人間が居ないと力が弱い妖怪。人間がいると大抵強い妖怪。

外に行っても戦闘系種族である鬼の中でも特殊な存在。

そして今は、畜生（黒猫）の身。

カーヤと呼ばれている黒猫に霊眠させられた後、さつき達には強気に出ていた。

だが、内心不安でいっぱいだった。

天ノ川小学校の人間に害を与える妖怪達は社交的ではなかったため、比較的しゃべるのが好きな天邪鬼は、無害な妖怪達と元々仲が良かった。

天邪鬼は、猫の身に霊眠させられたことによって、その妖怪達に嫌われることを恐れていた。

「へっ、怖れを栄養にする天邪鬼様が恐れるなんてな。」

自嘲しながら、目の前の古い校舎を見上げた。

通常の弱い妖気ではなく、嫌な妖気を放っていた。

また、何かが霊眠から目覚めたようだ。

「そういや、昨日、家で同じ妖気を感じたな。」

自分が霊眠している猫を飼っている少女を思い浮かべた。

グチグチ言いながらも天邪鬼を家に置き、きちんと餌もくれる少

女。
そして、その弟で、天邪鬼を妖怪とすら思っていない幼い少年。
天邪鬼は、霊眠させた変な姉弟に恨みを抱きつつも、感謝や興味といった感情も抱いていた。
はあ、と息を吐きつつ、目を閉じて感覚を鋭くしていく。
嫌な妖気の出所を相手に気付かれないように慎重に探っていく。
人間に害を与える妖怪の一部には、同じ妖怪にも牙を向くものがいる。
怖れを少ししか取り込めない今の身では、対抗できる程力が持てない。
妖気は、音楽室から出ていた。
「音楽室、呪いのピアノか。」
対処の仕方は知らない、あいつらが助けを求めてきても助言はできないな。
さて、どうするか見させてもらうか。
強い妖怪がいるので、会いたい連中にも会えそうにないと、家に戻ろうとした時であった。
「っ！？」
視界の隅に新校舎から出てくる男を見かけた。
嫌な予感がして男をはっきり見た途端、天邪鬼は後ろを向いて全力で走り、いや、逃げ始めた。
「なんで、なんであんなのがいるんだ！」
呪いのピアノみたいな嫌な妖気ではない。

圧倒的な威圧感を感じさせるくらい濃密な妖気である。
ここのボスみたいな妖怪である逢魔は、嫌な妖気の塊みたいなものだ。
純粋な戦闘力というより、妖怪を操る小細工みたいな妖力。
だが、あの、あの左手から感じた妖気は、純粋な戦闘力の塊。
あれは、同族である鬼の力だ。
同じ鬼であるのに絶望的に差がある力を目のあたりにして、天邪鬼は妬みと恐怖を感じていた。

「シャレになんないぞ、あれは。」

全力で家に着いた天邪鬼はブルリと体を震わせると、勝手に作った寝床の毛布に入り込んだ。
そして、先ほどの事を忘れるためにも一眠りすることにした。

天邪鬼、同族を見かける。（後書き）

さて、天邪鬼はぬ～べ～をどうするんでしょうか。

『エリーゼのために』のエリーゼは、テレーゼかエリザベートらしい（前書き）

小学生組が出て来ない。

『エリーゼのために』のエリーゼは、テレーゼかエリザベートらしい

鵺野は、現場を一通り見て回り、最後の場所、旧校舎に来ていた。
今まで見て来た現場は、霊力が無いまたは、ほとんど残っていなかった。
だが、霊力から見て妖怪が関与していたことは分かった。
そして、ここ、旧校舎は妖気が霊水晶を見ずして分かるほど霊気が漂っていた。

「邪悪な霊気だな。」

慎重に旧校舎に入った。

「ん？これはいったい。」

邪悪な霊気とは別に違和感を感じる霊気に、龍脈に流れる自然的な霊気が感じられた。
鵺野は、旧校舎を見て回りつつ、旧校舎に出るというお化けは、違和感の方の霊気だと感じられた。
つまり、この邪悪な霊気は、元々いた複数であろう妖怪を遠ざけるほど力が強い。
自然と力が入るのを抑えて、霊気の元を探り当てた。

「音楽室か。」

なぜか音楽室の前に段ボールがあった。
気にしながら、扉を開けた。
音楽室は、がらんとしていた。

埃被ったピアノと壁に一枚の絵。
ほかの楽器は、新校舎にでも移したのか、何も残っていなかった。
?～?.?.?～♪
だが、鵺野が音楽室に入った途端、ピアノがメロディを奏で始めたのである。
『エリーゼのために』これを４回聞くと死ぬという噂があるのを鵺野は知っていた。
「霊水晶よ、妖怪を映し出せ！」
左手に持った霊水晶が光を放ち、ピアノではなく、壁の絵を照らした。
「っ！？」
絵のベートーベンが、絵から抜け出してきた。
鵺野は、念珠を取り出してお経を唱えようとした。
バチッ
青い火花が走り、念珠を吹き飛ばした。
「・・・いきなり呪いをかけてくるとは。覇鬼、力を借りるぞ！」
黒い手袋を外し、鬼の手を曝す。
すると、鬼の手が伸びてベートーベンの形をした妖怪を切り裂いた。
なんともあっけない終幕である。

『鳴介、あとでおいしいもの寄越せよ。俺は眠い。家についたら起こせ。』

一撃で妖怪を退治した鬼の手から声がして、勝手に手袋が飛んできて鬼の手を再び隠した。

「はあ、また金欠か。」

鵺野は、財布を覗き込んでため息をついた。

『エリーゼのために』のエリーゼは、テレーゼかエリザベートらしい（後書き）

思ったよりというより、たった数行で戦闘が終わった。
書いたこっちがびっくりした。

あれ？妖怪は？（前書き）

こっちは、小学生組

あれ？妖怪は？

夜、さつきはベットで耳栓を手に悩んでいた。
昼間はナイス案だと考えもしなかったが、昨夜の出来事を思い起こして、こんなもので防げるのか不安になったのである。
昨夜ピアノは、電話機、オルゴール、ラジオと様々な媒体を通してエリーゼを聞かせてきた。
そんなピアノが、耳栓ぐらいであきらめるだろうか。

「ええーい、もう寝よっ！」

さつきは考えるより行動派であった。
布団を深くかぶって寝転がる。
ギュッと耳栓を握りしめて、天井を見つめる間に寝入ってしまった。

「で、何も起きなかったのですか？」

「そうなの。朝までぐっすり。もう、出ないんじゃない？」

さつきは、嬉しそうにくるりと一回転した。
それを見て、青山はじめはため息をついた。

「お前なあ、まだ昨日の夜だけだろ。」

「そうですね。心霊現象は、油断した所で襲いかかってくるものです。」

レオがはじめの言うことに、うんうんと頷きながら言った。

「お姉ちゃん大丈夫なの？」

敬一郎が涙目になってさつきを見上げる。

「そいつはもう居ねえよ。」

突然、上から声が聞こえた。

さつき達が見あげると、自動販売機の上に天邪鬼がいた。

「居ないって、どういうことよ？」

「そのままさ。お前に呪いを掛けていた妖怪はもう居ない。」

「それはおかしいですね。一度掛けた呪いを放っておいて居なくなるという行動はしないはずです。」

天邪鬼の言うことに眼鏡をクイッと上げながらレオが反論する。

「ああ、確かにな。だがな、妖怪同士の仲が良いとは限らない。赤紙青紙がトイレの花子さんを追い出したように、妖怪を喰ったり、殺したりする妖怪だっている。あいつは、同じ妖怪にやられたのさ。」

天邪鬼は嘲笑するように目を細めて口端を軽く上げる。

そして、息を飲むさつき達を面白そうに見ながら続けた。

「その妖怪がお前ら人間を襲う可能性はあまりないから安心しろ。ただ、一つ言っておくぞ。新任教師とやらに関わるな。後悔するぜ。」

最後にまたニヤッと笑いを浮かべて、どこかの庭先に入っていった。

『・・・』

残されたさつき達は、あのピアノの妖怪をやった妖怪に寒気が走ると同時に、新任教師の忠告が気になって始業のチャイムが鳴るまで突っ立っていた。

ただ、昼休みに行った音楽室で粉々に砕けた絵があったことが、天邪鬼の信憑性を高めていた。

あれ？妖怪は？（後書き）

次からは、さつき達がぬ～べ～を調べ始めます。

対してさつき達にぬ～べ～の事を教えた天邪鬼は何を考えているのか。

少年探偵達、鵺野を探る（前書き）

今回は、天邪鬼は出てきません。

少年探偵達、槲野を探る

新任の先生に関わるなと天邪鬼に言われたことで、新任の先生を探ろうと話が出ていた。
昼休みに集まった5人は、屋上へ続く階段の踊り場で話し合いを始めた。

「なんでその先生について調べるのよ？」

「天邪鬼が言っていたじゃないですか、あのピアノの妖怪をやっつけたのは別妖怪だって。それが新任の先生なんですよ。」

「悪さをする前に正体を探って霊眠させるわけだ。」

「しかし、天邪鬼さんははっきり言ったわけじゃないですよ。」

「そうよ。天邪鬼が私たちを脅かしてるだけかもしれないじゃない。」

「ぬ～べ～、面白かったよ。」

先生を探ることを提案したレオとそれに賛成するはじめ。
それに対して、懐疑的な女子陣と反対らしい敬一郎。

「え？敬一郎、その先生の授業受けたの？」

「うん。体育で一緒にサッカーやったよ。」

「なあ、ぬ～べ～って名前か？」

「自己紹介でぬ～べ～と呼んでくれって。」

さつき達は、実際に会っている敬一郎から話を聞き出した。

「つまり、本名は鵺野鳴介あだ名はぬ～べ～。眉が太くて長く、左手に黒い手袋をはめた面白い先生か。」

聞き出せたは、明るく面白いという印象だけだった。

「では、こういうのはどうでしょう。放課後、僕とはじめで先生をつけてみます。それで、明日の朝に報告しますよ。」

「私たちは？」

「あまり大勢と行くと気づかれますからね。ここに詳しくて逃げやすい僕らがいいでしょう。」

さつきと桃子はここに来てまだ半年も経っていないため、地理に疎い。

その点、一年からここにいるレオとはじめは、男ということもあり、あちこち探検して逃げ道くらいたくさん作れるはずである。

それに、さつきと敬一郎は運動音痴、桃子も運動が苦手な方に入る。

監視と逃げるだけならレオとはじめだけの方が効率的であった。

「じゃあ、俺たちがしっかり調べてきてやるよ。」

「明日を楽しみにしておいてください。」

放課後、はじめとレオは、鵺野を監視していた。
鵺野は、旧校舎の裏手で何かを調べているようだった。
二人は授業が終わると、急いで探し始めて、やっと見つけた時には既にそこにいた。

「何やってんだ？」

「う～む、縄張りでも作っているのでしょうか？ピアノの妖怪も倒しましたしね。」

茂みから観察しながら考えているうちに、鵺野が立ち上がった。
音をできるだけ立てないようについていく二人。
鵺野は、今度は旧校舎の横手に座り込んで何やら調べ始める。

「ほら、やはり縄張りですよ。」

レオが自慢げに胸を張るが、猫や犬じゃあるまいしとはじめは半信半疑のようだった。
でも、とはじめは鵺野を見ながら思う。
敬一郎の話を聞いて、気になっていたのは左手の黒い手袋である。
確かに鵺野の左手には不自然な黒い手袋がはめてあった。

「ん、なんだ？」

一瞬、鵺野が左手に話しかけているように見えた。
レオは、自説を自慢げに話していて気付いていなかったようだ。

「・・・怪しいな。」

「ええ、怪しすぎます。だいたいがですね、ここに来ること自体、ほかの先生はあまりしないんです。妖怪を信じてなくても少し不気味ですから。」

「ああ・・・」

見間違いかもしれないと、再び鵺野に視線を戻した。
もう一度見えたらきちんと言おうと、目を瓶の底のように見開く。

「あ、また移動するみたいですね。」

今度はどこに行くのか。
気づかれないように追いかけていると、旧校舎正面に曲がって行くのを最後に見失ってしまった。
旧校舎の前には、広場しかない。

「ということは、旧校舎の中かー？」

苦い顔で旧校舎を見上げるはじめ。
旧校舎にはいい思い出などなかった。
あそこに行くといつも命の危機に曝されている。

「入りますか？」

レオも困った顔ではじめを見た。

「・・・というか校舎で尾行できるのか？」

あ、とレオも気付く。
旧校舎は足音が響く上に、隠れるところが少ない。
仕方ないよな、と出てくるのを隠れて待つことにした。

「・・・で、出て来なかったと。」
さつきは、腰に手を当てて二人をにらんだ。
昨日の二人の報告を、登校中に聞くうちにさつきの機嫌が悪くなっていった。
「仕方ないだろ。待っても待っても出て来なかったんだから。」
事実、鵺野は一時間待っても出て来なかった。
「収穫ないのに変わりないでしょ。いいわ、次は私が探って見る。」
フンッと両手に拳を作って気合を入れるさつき。
「私も同伴させてください。」
桃子もさつきが心配なのか、興味があるのか、同行することになった。
「じゃあ、放課後にやるわよ。」

少年探偵達、鵺野を探る（後書き）

はい、今回はここまでです。

次は、ぬ～べ～とさつきの再会ですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7447x/

ぬ～べ～転勤する

2011年11月6日03時18分発行